

バーネット・ニューマンの1960年代後半における自己の再定位  
—財団所蔵書簡の分析を通じて—

吉田 侑李 ライス大学

本発表は、抽象表現主義の作家バーネット・ニューマン (Barnett Newman, 1905-70) が1960年代後半において、自身を戦後の米国美術史にどのように位置づけようとしたかを考察する。ニューヨークのバーネット・ニューマン財団には、作家が生前に保存していた一万六千点以上の資料が所蔵されており、ここでの一年間にわたる網羅的な調査の結果、晩年のニューマンの書簡からは次の三つの傾向を読み取ることができた。

第一に、抽象表現主義の他の作家たちと比較した自身の主流意識。1966年、知人の美術史家に対し、自作《アブラハム》(1949年)こそが史上初の黒い絵画であり、その作品を見ていなかったら、アド・ラインハートは「黒い絵画を制作することはなかった」(所蔵番号:14/23)と記している。1967年、いったん出品を承諾した展覧会が、ラインハートの功績を称える意図があることを知ると、参加を取り下げている(1/15)。ニューマンは過去の自作の先見性や独自性に対する強い自負をもっていた。

第二に、抽象表現主義の歴史的評価に対する意識。1965年、ロサンゼルス郡立美術館で「ニューヨーク・スクール—第一世代」展が開催された。ここに参加したニューマンは、展示担当者に対し「疑わしい歴史的事実の証人として立ち会うつもりはない」(18/134)と伝え、同展に60年代の作品が含まれないことを抗議し、さらに各作品の正確な展示履歴をカタログに掲載することを要求する。抽象表現主義を50年代末で区分しようとする展示意図を否定し、自身が現役作家であることを強く主張したと解釈できる。

第三に、若手作家のリーダーとしての自負。1965年のサンパウロ・ビエンナーレでは、ニューマンは唯一の年長作家として、ドナルド・ジャッドやフランク・ステラらといった若手とともに参加した。ここでは、参加作家たちを一つの列車ととらえ、自らが「機関車」(14/124)として彼らを牽引する必要性を認識していた。若手作家のリーダーを自任しつつ、未来への影響力を残そうとしている。

1960年代後半のニューマン作品は画面が巨大化し、筆触の抑制や鮮明な色彩が顕著になる。2005年、サラ・リッチはこれらの作品の分析を通じ、抽象表現主義が過去のものになりつつあるという不安から、ニューマンがミニマリズムなどへと接近したと指摘した。今回の書簡の調査によってリッチの推定が裏付けられるとともに、作風の変化が自身を戦後米国美術史の過去・現在・未来のなかに再定位しようとする戦略的な試みであったとの解釈が可能になる。ニューマンの晩年の再評価によって、抽象表現主義からミニマリズムやポップ・アートへと展開する米国美術史の流れそのものを再考する契機になると同時に、1960年代後半における抽象表現主義の作家たちの活動に新たな視座を与えることになるだろう。

(よしだ・ゆうり)